

『熊本バンド研究』への思い

杉井六郎
(大学名誉教授)

●本誌グラビア頁をご参照
下さい。

同志社大学人文科学研究所の研究叢書Ⅶとして、『熊本バンド研究——日本プロテスタンティズムの一流流と展開』は一九六五年八月に初刷を出してから三十余年を経過し、昨年九月、新装版として第一刷が刊行された。ちょうど昨年六月、七月、そして八月の初旬は、みず書房の長野聡氏と連絡をとって、当方でまとめて提出した誤植の訂正洩れの箇所処理、可能な範囲内での校正の加除作業を進めていたわけであるから、はやいものでもう一年を迎えることになる。

この作業は、改訂新版を刊行するという作業ではなく、手込んだ資料編の部分などは、限られた字数の中で、訂正、加除を頻繁におこなうことは至難に近く、もと原稿との厳密な照合も現段階では、完璧を期しえないこともあって、そのままとした場合もあり、他日を期しえないことになったことはなんと

心残りのことであつた。

そうした心残りのなかで、「新装版」の線で作業を進めることを応諾して、改訂を慎み、逆に旧版の体裁をそのまま残した一つに、グラビアページ所収の「ゼーンズより受洗した洋学校生徒（明治九年四月撮影・小崎弘道『七十年の回顧』所収）」がある。

小崎弘道の『七十年の回顧』に収められている熊本洋学校生徒の、キャプテン・ゼーンズより洗礼をうけた青年たちの「写真」は、この共同研究をはじめた当初以来の「夢」に思う「幻」の青年群像でもあつた。いかにして、小崎弘道が——線で示した、その名前の知れない人々を掘り起こして行くことができるか、と。——線で示されている人々は、小崎を真中にかこんだ前列の八人のうち二人、中列は五人のうち二人、後列は九人

の名前がすべて知られて、総勢二十二人のうち、名前の知らない人はあわせて四人である。黒足袋をはき、高下駄の足元は当時の肥後の青年の気風を示すものと思われた。

したがって、*「迫害の進むなかで、この写真に見えるゼーン*から洗札をうけた青年たちの多くは、のちに京都同志社に来て新島襄をはじめ、デイヴィス、ラーネットら宣教師の教をうけることになる。したがって、特に小崎の『七十年の回顧』に、畷線で、その名前の掲げられていない青年たちについては、それが誰であるか、まったく知るつてもないまま、もどかしく経過した。

実は、小崎弘道の『七十年の回顧』に見られる写真と全く同じ写真を襲蔵していた「森田久萬人旧蔵資料」は、森田久萬人研究の先達であるいまはなき今谷逸之助先生から詳細な報告をいただいたのは『熊本バンド研究』の出版後、蒐集史料の総括的整理を進める段階で、撮影した写真を見ることにはじまり、筆者はかねて抱いていた腹稿を、その年の秋開催された『熊本バンド出版記念会（於毎日新聞ホール）で発表し、これを『キリスト教社会問題研究』16・17合併号（一九七〇年三月）に『奉教趣意書』成立に関する若干の考察』として発表し、これを土台として『徳富蘇峰の研究』（一九七七年七月、法政大学出版局）の第一章「肥後の維新」と猪一郎——「花岡山奉教趣意書の成立」にまとめて発表した。

したがって、筆者にとつては森田久萬人の旧蔵になるこの写真については、はやく今谷逸之助先生より伺い、「徳富猪一郎の信仰の成立過程」をたどるまたとないルートにあたる写真であ

り、しかも小崎弘道の記憶をはるかに越えて、困難のなかで信仰を守る軀こゝろの熱あつい意識の成立してゆく過程を呈示する貴重な一里塚であったわけである。しかし、この史料の披露・紹介は、共同研究『熊本バンド研究』の発表後に調査、検討しうまれたことであり、熊本バンドにかかわることはいうまでもないが、この度の復刊に当って、これを持ち出して、共同研究の成果である『熊本バンド研究』のグラビア版を改めるべきではない、かたくなではあるが、それを行えば、改版の了解を必要とする。それは、みずず書房から提示されている新装版の「共同研究」を破る汚点を残すと。

この五月はじめ、岩村信二先生の発起になる第二回の「熊本バンドの子孫の会」に招かれて、森田久萬人の襲蔵写真のことに及んだのは、やはり、ここでなら史料の伝える真実は、電流のように通じ、ご了解をいただけるであろうと。

多数お集りになったお孫さんの会合で、写真の複写を提示して Herman Morita, “Kumamoto Christian Brethern” を紹介披露し、子孫の共有の財産の一つとしようとした真意はここにあったことを了承いただきたい。

実は五月「熊本バンド子孫の会」で東上の前に、四月六日、森田久萬人の御遺族のお招きを頂き、高橋和様、森田昌三様お立合のもと、伝来の森田久萬人の史料を拝見し、件の写真の現物を手にとつて見ることができ、また、従来未見の森田久萬人宛新島襄書簡（扁額に納められて）も見ることができたことを申し添える。「熊本バンド研究」はここにさらに新しい段階を迎えた。（六月末日誌す）

“昭和二十年夏” —同志社中学校—

資料「二製の疎開」に因んで

須田 寛

(JRC東海会長)

48年旧制同志社中学校卒業

昭和十六年に始まった太平洋戦争は十七年五月のミッドウェイ海戦を契機に日本が守勢にまわり、十九年六月マリアナ諸島が米軍の手におちると本土が直接空襲にさらされるに至り、戦勢は急速に傾きはじめた。私達は戦時中の十八年四月同志社中学に入學したが平和教育を旨とする同志社も戦時中は戦争の荒波を大きくかぶっていた。

二十年に入ると学校の授業もまともに行われなくなり連日のように勤労作業に動員された。作業はまず農業動員がある。近郊の農家へ行って農作業の手伝いをしたり校庭を開懇して芋畑にしたりした。当時今出川や岩倉の高商(現高校)グラウンドはほとんどが芋畑と化した。

次に防空壕造りや疎開家屋の取壊しである。御池・五条通の家屋の取壊しとその廃材から鉄釘をぬきとって供出する作業

(釘が金属入手難で不足していた)が続いた。

授業の方も先生方がどんどん召集されて欠員となり兵役につかない先生の授業ばかりが繰返される異常事態となり、それも休講が目立った。肝心の軍事教練も軍人の教官は召集され老退役軍人が幅をきかせていた。そして新学年に入ると中学校以上の授業は原則として中止となり三年生以上は軍需工場の工具として動員(毎日工場へ出勤)されるという非常事態に突入した。私達同志社中学三年生は六月十四日(この日付は不思議と今も忘れない)から京都市内山科の三菱第二製作所(名古屋で被災した三菱重工の航空機試作工場が山科の紡績工場あとに疎開してきたもの)に動員されることになったのである。

六月十四日は梅雨空のうっとうしい天気であった。今出川のチャペル(当時は講堂と呼んでいた)で壮行式があり、下級生

に見送られて徒歩で隊伍を組んで山科にむかった。九条山まで来たとき空襲警報が発令され京津電車の九条山駅裏手の林の中に待避した。曇りで機影は見えなかったが名古屋爆撃に向かう米軍のB29爆撃機の大編隊が上空を通過したらしく数分間にわたって重苦しい爆音がきこえその間、林の中で身じろぎもせず隠れていたのを覚えている。まさに前途が思いやられる動員初日であった。

動員はされてみたもののまともな作業のない日も多かった。それは輸送がままならず名古屋から送られてくる筈の機械や部品等がなかなか到着しないからであった。作業も機械の据付け、部品の整理、基礎的な訓練(やすりかけ等の)が中心でむしろ教練や農作業に明け暮れたそれ以前より楽な状態でさえあった。ようやく機械が整い、いよいよ本格的に作業が始まるというところで八月の敗戦を迎えたのである。



筆者左。同級生の宮崎吉男君(故人)と。
昭和20年秋、ハリス理化学館前にて

戦後五十年余を経た平成八年、三菱重工業小牧製作所(名古屋)を見学した際、資料館でふとひとつの資料が私の目にとまった。それは『二製の疎開』であった。そこには私達が動員された疎開工場のことが詳しく当時の工場幹部の手で綴られていたのである。しかも驚くべきことに私達の知らない間に空襲に備えてトンネル工場に再移転する計画が進んでいたのである。その候補地として琵琶湖疎水の水路トンネル(勿論通水をとめて)と国鉄東山トンネル(二本の上り線中の一本)を転用する予定だったことが記されている。もし実行されていたら私達はどうか予想していたろうか。文中にも「トンネル内の湿気などで病人多発が予想されるがそれも止むを得ない」という当時の人間軽視の軍の考え方が記されており何ともやりきれない気持ちになった。今日の平和な同志社をみるにつけて同志社にも過去にこのようななきびしい時代のあったことを記録することも意義深いことと考へ、この資料のコピーを譲り受け、同志社社史資料室に保存していただくこととした次第である。

前記のような異常な戦時下にあっても何人かの私達の恩師が同志社の人間尊重のよき伝統を守ろうとして苦勞されていたことを特筆しておきたい。敗戦直後の混乱時「私達は命をかけても君達を守ります」と皆の前で訓示された今は亡き恩師の一言を今も昨日のように思い出すのである。

節句よ いざいざい

田中 久雄

(株田中彌専務取締役)

56年文学部文化学科日本文化史専攻卒業

ローマ皇帝ネロの迫害から逃れる途中、キリストに出会ったペテロは「主よ、何処へ行きたまうや」と問う。クオヴァアデイスという題名で有名な小説の一節です。お節句が私たちの生活から次第に縁遠いものになりつつある昨今、なんとなくペテロの問いかけが浮かんでまいりました。

お節句よ、何処へ行きたまうや？

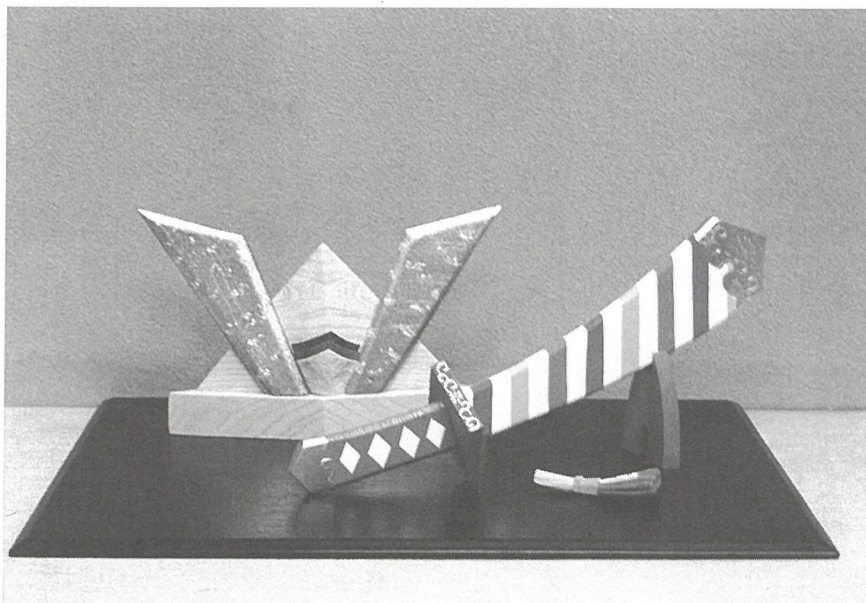
「あなたが逃げ出したローマに赴く」というキリストの答えに己の姿を恥じたペテロは、思い直してローマに引き返し信仰に殉じる。処刑に際してもペテロはキリストと同じでは恐れ多いと、十字架上で逆さまになって磔にされたとか。

信仰を持たない私の問いには、もとより何処からも答えは返ってきません。拙文を最後までお読みいただいても、問いだけが空しく消えて行くのみと最初にお詫びしておきます。

節句といえば桃の節句、お雛様を、あるいは端午の節句だけを頭に浮かべられる方が多いと思います。実は節句はその二つだけではなく、五つあります。江戸時代、幕府は式日をさだめて五節句としました。公家と武家両方のしきたりの合作です。

一月七日の人日（七草）、三月三日の上巳（雛祭り）、五月五日の端午（菖蒲）、七月七日の七夕（乞巧尊）、九月九日の重陽（菊の節句）以上の五つです。詳しいことをお知りになりたい方は、淡交社発行の『五節供の楽しみ』をお読みください。

七草粥をたべる方でも、この日が「人日」だとは多分ご存じない。七月七日、昔は七夕の笹をよく見かけたものでしたが、きょうびは幼稚園にでも行かないとお目にかかれない。丸をくまたはキュウと発音する例の語呂あそびの結果、九月九日は『救



5月5日 端午 菖蒲の節供

急の日』となりました。救急車の正しい利用の仕方、応急手当の知識などをPRする救急医療週間とかで、厚生省がお定めになりました。

講談社発行の暮らしの歳時記『今日は何の日か？事典』の九月の行事・記念日のページを開けても、九月二日は宝くじの日、四日くしの日、二十九日クリーニングの日しか載っていません。明治維新で《菊が栄えて葵は枯れ》ましたが、いまや菊も影がうすく、九月の行事から重陽の節句は姿を消しました。文化国家としては、菊をめぐるよりも応急手当の知識から人命を救うほうがより大切と大臣閣下が考えられたからでありましょう。

結局、五節句のうち一月、七月、九月のそれはいずれも氣息奄奄、息もたえだえといったありさま。だれもが知っているのは三月と五月だけになってしまいました。五月は端午の節句です。その「端午」の漢字をすらすら書ける人がはたして現在どれだけおられるのか。ちなみに、私のワープロですぐ出てくるのは「単語」と「丹後」。「タンゴ」と書かれても文句の言いようもない時代になりました。

五つのうち三つまでもが姿を消しつつある。残る二つはどうなるのか。これが本稿のテーマです。長嶋茂雄選手は現役を引退するとき、「巨人軍は永遠に不滅です」とかいったそうです。私もお節句でメシを食っている人間です。胸を張って「節句は永遠に不滅」と叫びたいのはやまやまです。

でも、「永遠不滅」は平家物語を持ち出すまでもなく、盛者必衰の理に反します。ここは宿敵カルタゴの滅亡をまのあたりにしたローマの將軍スキピオの述懐に耳を傾けたい。火炎のなか

のカルタゴの街の前にスキピオは申しました。

「アッシリアすでに無く、ペルシャ、マケドニアまた滅びぬ
カルタゴいま火中にあり、次に来るものはそれローマか」
スキピオの尻馬に乗って私も申したい。

「人日すでになく、七夕、長陽の節句、また影うすし

端午の節句、ゴールデンウィークの渦中にあり

次に姿を消すは、それ、ひな祭りか」

† †

日本人の生活習慣、一年のしきたりの中でもっともウエートが重いのは、やはり正月、正月三が日でしょう。その正月の過ごし方がここへきて大きく変わりました。今まではどうしてきたか。神社仏閣に初参りする、年始回りをする。それ以外には、少なくとも大人は家にいたものです。子供だって、風揚げや羽根突きで遊ぶとき戸外に出るだけでした。正月に家を空けるなんて、どう考えて考えられないことでした。

今はどうですか。海外旅行は当たり前になりました。スキー



9月9日 重陽 菊の節句

好きの一家なら、スキー旅行に出ても不思議ではありません。自宅を留守にして、ガラガラになった都会のホテルでわざわざ三が日を過ごす夫婦も知っています。

「もういくつ寝ると、お正月」子供にとっては年に一回やってくるこの世のパラダイス。ワクワク、ドキドキの連続です。大人だって、それなりに緊張し威儀を正したものでした。言葉を返せば、ふだんは粗末な生活を続けざるをえず、そのぶん、正月との落差が大きかったと言えましょう。着るものも食べるものも《毎月が正月》、そんな時代になってしまいました。

「節句ばたらき」という言葉がありました。むかし奉公人が休めるのは盆正月と節句だけ。ふだん怠けているものが節句になって働くのを皮肉ったものです。この言葉も週休二日制の今日、死語となりました。

正月、節句のしきたりは、明らかに音をたてて崩れつつあります。一方、古いしきたりに取って代わって新しい習慣が生まれてつつあるとも思えません。このところ二月、日本中で雛人形の売上よりバレンタイン・チョコの販売額のほうが上回っているようです。バレンタインも母の日も社会現象には違いありませんが、まだまだ生活のしきたりとして定着したとは思えません。販売促進に利用されているイベントに過ぎないようです。

† †

徳川時代からこのかた、お上は節句にたいしてどんな態度をとってきたか。幕府は慢性的経済危機から財政立て直しを図るために、奢侈禁止令を頻発しました。雛人形もその槍玉にあげられました。逆に申せば、目の敵にされるほど贅沢な雛人形が

作られていたとも申せます。地方の富豪も競って京都の雛人形を買い求め、珍重しました。

奢侈禁止令のきわめつけは七七禁令です。戦争を直前にした一九四〇年政府による奢侈品製造販売制限令で、七月七日から施行ということから七七禁令と呼ばれました。戦争遂行のための政令はまさしく人形業界の息の根を止めました。

戦後食うや食わずの時代を乗り越えたと、三月、五月の節句はみごとに復活。質はともかく、数量的には旧に倍しての伸びを示しました。最盛期、一番売れたのはいつ頃か。おそらく今から十〜二十年前、一九八〇年代後半かと想像します。

戦前と戦後、服装で一番変わったのは何か。男が帽子をかぶらなくなったことだと私は思っています。大学生は角帽を丁稚さんは烏打帽をというように、大人はみんな帽子をかぶっていました。戦前戦後を通じて帽子をかぶらず、戦前戦後もずっと和服オンリーの男性は誰かお解りでしょうか。関取さんだけです。

戦後、男がまずほとんど着物を着なくなり、続いて女性の着物ばなれが進んできました。和服業界が衰退カーブを描き出した、その後を人形が追っかけているように思われます。

偶然の一致でしょうか、節句も男の節句から陰りが見えてきました。憲法記念日も子供の日もゴールデンウィークの渦のなかに埋没しつつあります。それに比べると桃の節句、雛祭りはいまのところ健在です。でも、大ローマ帝国の栄光と同様に、ひな祭りのしきたりもいつまで続くものなのか。

明治六年（一八七三年）政府は太政官布達で五節句の廃止を布告しました。《旧来の陋習を破ろう》という意図だったと思います。お節句よりも鹿鳴館でダンスするのが文明開化にふさわしいとの判断でしょう。この余りにも無邪気な布告は、さすがに数年で撤回されましたが。

それから百年、伝統産業振興法、人形などの伝統工芸品の製造販売を国が援助しようという法律が出来ました。業界がお上から禁止や制約でなく、支援を受けるのは後にも先にも例がありません。前代未聞のことです。

権力が商売を弾圧しても面従腹背、法の裏をかいくぐるなど対応の仕方はありえます。しかし、この度は逆で助けてやろうというのです。業界が振興法の適用を受けた際、お節句もこれまで。つかえ棒がなければやっていけない時代になったんだと悲しくなりました。

同志社大学予科（旧制）に入学して、最初に足を踏み入れたのが「有終館」でした。節句人形を商う人間として、いま脳裏にあるのは、いかにして有終の美を飾るか、その一語に尽きます。滅びいくものは滅びるに任せよ。寿命が尽きかけたのに、延命策をあれこれ考えるほど惨めなことはありません。

「一戦して止まず。二戦して止まず。三戦して止まず。刀折れ矢尽きて止む」。先師の訓えです。

あと何年、やるだけやって、それでも駄目なら潔く店を畳む。刀折れ矢尽きてのち、のれんを降ろせるのならもって瞑すべし。そんなふうに考えています。

アーマンド・E・シンガー教授の アーモスト巡り

田口哲也

(大学言語文化教育研究センター助教)

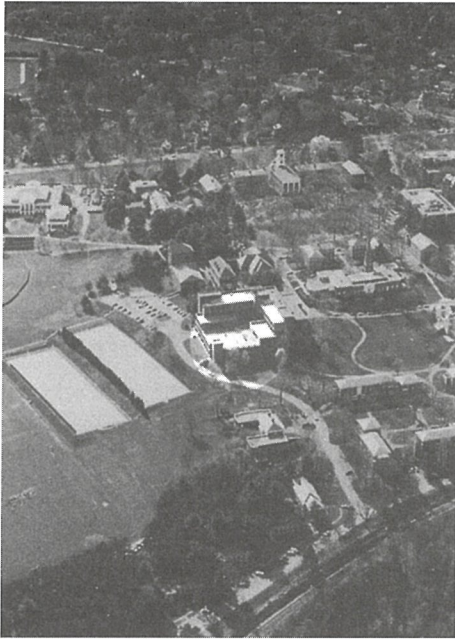
周知のように、新島襄が学んだ米国マサチューセッツ州の名門アーモスト大学と同志社とは深い絆で結ばれている。アーモストの歴史、あるいは同志社とアーモストとの関係についてはすでに多くの書き物がある。またアーモスト大学への留学、あるいはサマープログラムや、その他様々な交流を通してアーモストを訪れた同志社人はかなりの数に上るはずである。アーモスト大学のジョンソン・チャペル内に掲げられている新島先生の肖像画を見て感慨に耽った人も多いはずだ。

学会やその他の学外での様々な活動に携わっているときに、私が同志社の教員であることを知って同志社出身の方から声を掛けて戴くことがしばしばある。それとまったく同じように、国際学会などで海外に出張した折に、同志社とアーモストの特別の関係からか、私が同志社から来たことを知って声を掛けて

下さるアーモスト大学出身者も多い。一九九七年の秋に学会発表のために立ち寄ったウエスト・ヴァージニア大学での経験もそのひとつである。世界各地から千人近くの学者が参加する、文学・映像批評理論に関するこの国際学会を二十年以上にわたって主催してきたのはウエスト・ヴァージニア大学のアーマンド・E・シンガー教授 (Prof. Armand E. Singer) である。教授は一九三五年のアーモスト大学卒であり、初対面でありながらまるで旧知の間柄のように話し掛けてこられた。教授はロマン語・ロマンス文学の専門家で、この方面での業績を数多く残しているほか、リムリックという特殊な詩型の専門家でもあり、一九九六年に『ウォード・マーデンの1001のホーニー・リムリック』という本をポストンで出版している詩人でもある。

ご存知の方も多いと思うが、アーモストの名前は英国のカナダ征服の軍を率いた将軍で、一七六〇年から六三年まで英領北アメリカの総督を務めたジェフリー・アーモスト卿 (Lord Jeffrey Amherst) に由来する。アーモスト卿の名に因んだ地名はマサチューセッツのアーモストだけではなく、北アメリカ中に広がっていて、特に有名なのはオハイオ州北部、クリーブランドの近くにあるアーモストとカナダのノヴァスコシア州の北にある風光明媚な町、アーモストであろう。

北アメリカはとにかく広い。訪れたことのある方にはこの辺の事情はよく理解できるであろうが、とにかくスーパーマーケットやレストランに行くのに三十分から場合によっては小一時間も車を走らさねばならないということがよくある。文明批評の

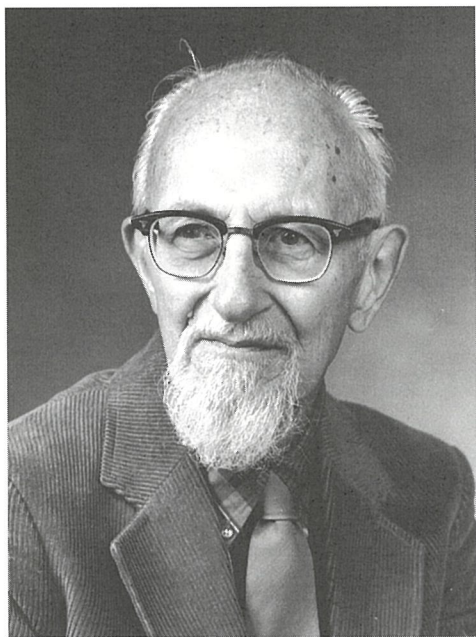


アーモスト大学のキャンパス全景 (Photo by Frank Ward)

元祖のひとりであるカナダの学者、マーシャル・マクルーハンなどは、日本やヨーロッパの人間には北アメリカの空間感覚を理解できないだろうとまで言った。広漠たる海のように広がった大地のなかに点在する人間をテクノロジが繋ぐようになってアメリカは初めて大国に変身していくが、現在の情報スーパーハイウェイの前には、航空機の国内線が、テレビのネットワークが、そして電話網がすでに網の目のように張り巡らされていたのである。Eメールが普及するまでは電話のネットワークがコミュニケーションの主力であった。

ところが、アメリカ合衆国では一九六四年から電話はすべて数字による通話になる。現在のようにダイヤル通話が普及するまでは、電話というのは、交換手に相手の番号を伝えて繋いでもらうのが普通で、六四年までは交換局のある地名と番号を交換手に告げていたのだ。従って、地名を廃止して局番を採用し、すべて数字による通話を始めるとアメリカの電話会社(AT&T)が通告したときには反対運動が起こったほどである。日本人のほとんどはダイヤル通話になってから電話を利用し始めたので、ダイヤル通話以前のアメリカの「電話文化」の中で育った人々のAT&Tの通告に対するショックは理解しにくいかもしれない。それは日本でいうと、例えば鳥丸今出川という言い方を廃止して、すべて七桁の郵便番号で住所を表示せよというのに似ている。

シンガー教授はこの一九六四年の数字による通話の開始を機に、ジェフリー・アーモスト卿の名に因んだ美しい響きを持つ地名が忘れられていくのを恐れ、アーモストという名の地名・



Prof. Armand E. Singer

町名がどれくらい全米に、あるいは世界中に広がっているものか、調査を初め、その報告を「アーモスト津々浦々」(“Amherst: Name Across the Land”)と題して『アーモスト同窓報』(Amherst Alumni News)に発表された。この報告によると、当時全米でアーモストという名のついた交換局がある州は二十五もあり、そのうち二つ以上の同様の交換局のある州が十三に上る。カナダの四つを加えると合計で四十五になる。シンガー教授のユーモアに満ちた詳細な調査報告をすべてここに翻訳するわけにはいかないが、実は『アーモスト同窓報』にまとめられた報告以後も調査は続けられ、それが「さらに麗しき名、アーモスト津々浦々」(“Amherst: Still the Fairest Name

across the Land”)と題されて最近まとめられた。その中には同志社のアーモスト館も出てくるのでこの二つの報告を以下紙面の許す限り紹介してみたい。

一七五九年の二月十三日に、当時のマサチューセッツの総督がアーモスト卿の名をとって現在のマサチューセッツ州アーモストが誕生したという話、また大学の名前はアーモスト卿からではなく、アーモストという町の名前から取られたことはアーモストの卒業生なら誰でも知っている。東海岸からテキサスマで、アーモストと名の付く町が全米に広がっているのはジェフリー・アーモスト卿の存在の大きさを考えれば当然のことかもしれないが、その中にはコロラド州のアーモストのようにわがマサチューセッツ州のアーモストから取られたものも含まれている。ちよつと意外なのはビルマにアーモストという名前の村とその村の名を冠した一地方があるという。またアーモスト島という名の島が三つあり、そのうちの二つはカナダに、残りのひとつは朝鮮にあるという。またヴァージニア州の由緒ある地域のひとつにアーモスト郡がある。一七一〇年から二十年の間に東部からの植民者がこの地域に根付いたが、彼らはこの地域をアーモスト卿を讃えてアーモスト郡と改名した。アーモスト卿は一度もヴァージニアの地を訪れたことがなかったにもかかわらず、一七五九年にヴァージニアの総督に任命されている。カナダのノヴァスコシアのアーモストについてはすでに触れたが、一七六〇年代にジョセフ・モース大佐という人物にこの土地が与えられている。彼はアーモスト卿の友人で、友人の武勳を讃えてこの地を改名した。

さてアームストを冠した地名は通りの名前まで含めるとますます多くなるのできりが無いが、北米に数多くあるのとはともかく、インドのカルカッタにもアームスト・ストリートとこの大きな氷河には名前がついているものがあり、ハーバード、エールと並んでアームスト氷河というものがあるらしい。スミスやドラクリフという名前の氷河もあるらしいが、これはハーバード氷河から分かれた小さな氷河のようである。さらに奇妙なことに雉のなかにアームストの名を含んだ種類のものがあって、何でも「アームスト夫人雉」(Lady Amherst pheasant)というのがあるらしい。これはジェフリー・アームスト卿の甥が自分の妻のために名付けたのが始まりで、彼はビルマ産の蘭の一種にもアームストの名を冠した (Amherstia Tree あるいは *Amherstia nobilis*)。

先にカルカッタのアームストが出てきたが、一九八七年のスピルバークの『太陽の帝国』の中で、混乱の中、両親とはぐれてしまうイギリス人の少年の住所は、上海市アームスト・ロード十三番地であった。映画のついでに言うと、ウィム・ヴェンダースの『パリ、テキサス』というのがあったが、このテキサス州のパリから約五マイル北東にアームストという町がある。実はテキサスにはもう一つアームストという名の町があつて、郵便番号がなければ区別がつかない。ニューヨーク州にもアームストがある。イラン革命の際に取材に出掛けて行って逆に九か月間監禁されたシンシア・ドワイアーという女性がいたが、彼女の出身地である。この町は一九九五年の調査では全米で最

も犯罪率の低い町とされ、一九八七年にはニューヨーク州立大学のアームスト校でパラリンピックが開催されている。

カルカッタ、上海のアームストを紹介したが、オーストラリアにも二つある。メルボルンの北西約二〇〇マイルに位置するアームストと、プリズベーンから約五〇〇マイル北の、マッカイの近くにあるアームストである。アームスト出身者が故郷を懐かしんで自分の住む集落をこのように名付けたのではないかとシンガー教授は推測しているが、事實は定かではない。ニューメキシコ大学アルバカーキー校の近くのアームスト・ドライブ、ニュージャージー州イースト・オレンジヤ、テキサス州ヒューストンのアームスト・ストリート、あるいはロサンゼルスのアームスト・アベニュー、さらにはマサチューセッツ工科大学の近くの長い通りはアームスト・ストリートと、アメリカではアームストの名を冠した通りの名前はやたらと多いが、アームスト大学の卒業生には、このようなアメリカの小さな地名や町名よりも日本の同志社のアームスト館のほうがよく知られているはずだと、教授は説く。なにしろそれはアームスト大学の直接の文化遺産なのだから。

アームストの名を冠した山、泉、公園、美術館、商品、レコード会社、自動車会社、とシンガー教授の百科事典的な話はまだ続くが、今回はこの辺で。しかし、これほどアームストの名前に拘った人も、母校への愛に燃えた人も少ない。